



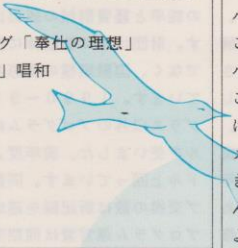
自分を越えた眼を Look Beyond Yourself

Raja

ラジェンドラ・K. サブ
1991-1992年度RI会長

1992. 5. 22 (金) 第222回例会

1. 点 鐘
2. ロータリーソング「奉仕の理想」
3. 「四つのテスト」唱和
4. 食 事
5. 会長の時間
6. 幹事報告
7. 各委員会報告
8. 卓 話
9. 点 鐘



第221回例会記録

(1992. 5. 15)

会長の時間 濱田 松太郎

皆さん今日は、本日は第221回例会です。

ところで、今年も僕の家を玄関先の電燈の上にツバメが参りまして、先週でしたか、可愛い雛の赤ちゃん5羽がかえり、親ツバメより餌をもらいながらすくすく元気に発育を遂げており、後4~5日もすれば巣立ちしていくことでしょう。よく観察していますと、親ツバメたちが遠くへ餌を求めて巣へ帰り、雛の大きな口へ次々と餌を与えている姿は、親子の愛情で当然のことながらすばらしいものだと感じます。

今年はツバメの来るのが3月21日でしたが時期的に少し平年より遅いのではないかと感じていました矢先、生れ故郷を忘れずによく来てくれました。ツバメが来るのは吉兆だと大変喜ばれている次第です。実は4~5年前のことでしたが、玄関の電燈の上に巣をかける関係で、

下が糞だらけになり大変汚れてきますので、ツバメが帰った後、電燈を掃除して巣を取壊したことがありました。その翌年、巣がないからツバメはもう来ないだろうと思っておりましてと、再び来まして直ぐにせせと巣を作るではありませんか、その有様を見て、これはツバメに対して済めことをしたなど心痛と反省しきりでありました。そして間もなく雛の赤ちゃんがかえったのですが、これから後は絶対このような行為は人間の得手勝手というもので、少々玄関が汚れても構わないと考えを改めた次第です。そうでなくては、地球全体の環境が、動植物の生存に対して年々悪化している現在、人為的にますますそれらの生存を妨げることになるからです。ツバメの例をとりましても、年々その数が減少しているのが現状です。そして、そのことが直接と間接とを問わず廻り廻ってそのツケが人間に悪影響を及ぼしていることは当然であります。どうかこの悪影響にめげず、来年もツバメが元気な姿を見せてくれるようなよい地球でありたいと切に願うものです。

次は、H・フォードの「奉仕を主とする事業は榮え、利得を主とする事業は衰える」というタイトルで話を進めて参りたいと思います。

フォードは職工から身を起し、アメリカの自動車王といわれるまでに成りました。彼に成功をもたらしたゴールデン・ルールとも言えるものがこの言葉でありましょう。

フォードの自動車業が大衆の奉仕になるまで

には、なみなみならぬ苦心がありました。

1905年フロリダ州で開催された自動車レースで大事故が発生し、フランス製の自動車が大破しましたが、フォードは、散乱した事故車の破片の中から今まで見たこともない金属性のバルブを拾い、調べてみたところ、すこぶる軽いうえに堅牢であることがわかりました。フランス車のスピードの秘密の一つはこれだな、と直感したフォードは、丁度新しい型の車を新しい製造法で造ろうと研究中であったので、早速その金属を部下に調べさせました。その結果、バナジウムを含んだフランス鋼であることが解りました。当時アメリカではその金属は生産されていなかったで、イギリスへ部下を派遣して技師をスカウトし、生産に乗り出しました。

それとともに、従来のモデルを徹底的に改良し、自動車の標準化を行いました。1908年モデル車がデビューしました。軽量で馬力があり、操縦しやすく、部品が簡単に入手でき、修理も容易で、そのうえ丈夫で安価なものでした。

こうして、当時望み得る最高の車をフォードシステムという流れ作業方式で大量に生産し、工員への待遇もよくしたので、社会奉仕につながり、大きく躍進することができました。

社会に有益な事業活動を心がけることが、自分たちの発展に結びつく、反社会的な事業を企て一時的暴利をむさぼっても、いずれは衰亡していく、最近の一連の悪徳商法の例をとってみても明らかです。事業に対する信念を正しくしっかりわかまえ、ロータリアンとして奉仕の理想、そして四つのテストとは何なのかを理解し向上に努力しなければならぬとつくづく感じた次第です。

本日のテーマをもう一度繰り返します。

「奉仕を主とする事業は栄え、利得を主とする事業は衰える」というH・フォードの言葉から引用させていただきました。

次は、ロータリー財団75秒卓話からで、第2週へ移ります。

「数字の背後にあるもの」というタイトルです。1990～91年度には、新記録の米貨で3,670万ドルの一般寄付（ポリオ・プラス、その他用途を限定しない寄付）がありました。

それは、1993～94年度にロータリアンがロータリー財団プログラムに参加するために、それを上回る金額を使えるということの意味します。ポリオ・プラス・キャンペーン中の一般寄付の減少を思うと、目を見張るような回復振ります。数字の背後にあるものを見ると、財団の能率と経費削減の成果は同じく目を見張ります。財団は単に他団体に補助金を授与するだけでなく、国際規模の多彩なプログラムを実施しています。1990～91年度には、ポリオ・プラス以外のプログラムに約米貨2,930万ドルを使いました。前年度よりほぼ米貨100万ドル上回っています。同額補助金と研究グループ交換の数は新記録を達成しました。しかし、プログラム運営費は同期間にわずかに米貨1万ドル増えただけです。一般寄付は米貨530万ドル、17%増えました。しかし、この新記録に到達するために、寄付増進費は米貨27万ドルで5%増えたに過ぎません。この増加の殆どすべては、コンピュータの向上とクラブと地区への寄付報告書の著しい改善によるものです。

実際1990～91年度には、新ポール・ハリス・フェローが37,091人（約2,000人の増加）増えたのに対し、寄付者への事務経費は10,000ドル減っています。

しかし、多分最も重要な数字は、ポリオ・プラス・プログラム以外への昨年度の補助金米貨2,930万ドルと、その3年前の一般寄付との比較です。その年、ポリオ・プラス・キャンペーンの大成功の最中、一般寄付は総額では米貨1,570万ドルでした。財団管理委員会はポリオ・プラス・キャンペーン全期間中、ロータリアンが期待してきた水準で財団プログラムに費用を投入し続けよう決めました。

このように、1987～88年度の一般寄付の1ドルは、1990～91年度プログラムに

ほぼ2ドルの割合で使われました。収益分(運用、寄付増進、一般運営費)をためて、この追加資金に充てました。

幹事報告 鈴木正敏
例会変更通知

- ・小林RC 5月20日 18:30~
出の山公園「いこいの家」
- ・延岡東RC 5月25日 18:30~
ガーデンベルズ延岡

出席報告	委員長代理	岩切正司
会 員 数		17名
欠 席 者 数		2名
H C 出席者数		15名
出 席 率		88.24%
欠 席 者 名		柳田・池田

ビ ジ タ ー

西都RC 数押 邦弘君・光井 雅弟君

親睦委員会より 委員長 斉藤 敦馬

今度親睦の白焼きを始めましたので、親睦をさらに深めていただく意味で、出席者全員に試食用シラ焼きを差し上げたいと思います。

会員卓話 5/8 児玉 武文 君

最近感じていることについてお話ししたい。
私は昭和47年頃に家を建てましたが、当時毎日神経を使う立場にホテル職場でいましたので、何か潤いを求めたいという考えで生意気にも小さい庭に池を造りまして、鯉を養っていました。初め20尾ぐらいいた鯉も、池から飛び出してなくなったりしましたが、長男が近所の川から取ってきた鯉が成長し、また、池の中で生まれた鯉が一尾おり、今では7尾います。
当時は家を建てた直後でもあって、経済的にも池にかかる金がありませんでしたので、取りあえず池を造り、自分で排水管を施工し、下水

道につながりました。ところが何しろ水流がありませんので、小さいスクリーを買ってきて取り付けたわけです。その後の反省として、池の底にもう1本管を引いて常に水流を作ることが必要であると思います。今まで濾過器を3台買い替えましたが、3年くらい前に斉藤さんが例会で卓話をされた時に、池にノリが張って困るがどうしたらよいかとお尋ねしましたら、実は青ノリは紫外線があるから張るので、日覆いしたらよいのではないかと教えていただきました。早速日覆いをしましたところ、紫外線が当たらないので青ノリは張らなくなりました。

池を掘るということは大変な工事であると思っておりました。特にこの地帯は砂地のため、土管を地中に入れて水を揚げなければなりません。たまたま近所の電器製品販売店の方から、水道用の井戸を掘ってみてはいかがですか、それなら12万円ぐらいでできるでしょう、と助言がありました。近所の井戸掘りを副業としている方に相談し、5月3日掘ってもらいました。

通常は1時間半で1本掘りあがるのですが、私のところでは10mを2時間半かけて掘りました。そうしますと、非常にきれいな水が、全然砂も混じってはず揚ってきました。お茶に入れたところ少しも濁らず、鉄分がないことがわかりました。その人が言われるのに、私が掘った井戸は絶対に砂が上らないのが契約条件である、もし砂が上ったらお金は要らない、とのことでした。結果的には、2時間半で、経費も約3万5千円で井戸が掘れたわけで、これならもっと早くすればよかったと思った次第です。

連休明けに、モーターの設置や配管工事をしてもらいました。あとは水質検査だけが問題として残されています。工事が終了して蛇口をひめると、水がサァーッと流れました。池の配管は、先の方が少しづつしてありますので、噴水のように水が出ました。昨今は、大企業が大きな仕事をやり、永く家業としてきた職業が変化を余儀なくされつつありますが、今回の井戸工を通じて、いろいろな人々の地域に密着した

職業奉仕の姿や、真心と心遣いといったものを痛く感じたのでした。私どもは日頃からサービス業のあり方について、社員にも自分自身にも言い聞かせているのですが、言うは易く、行うは難しで、なかなかききめがありません。蛇口の先が焼いて細くしてあることにも感心させられました。今まで水道の水でも鯉が生きて来たものですから横着を構えていましたが、地中から汲み揚げた水を入れるようになりますと、水のツヤが違い、鯉も生き生きとってきました。それを見ていると、私の心もなごんで参ります。

こういうことなら、もっと早く井戸掘りの計画を決意すればよかったと思うのです。

連休の最中に、このような貴重な体験を得たことを感謝しております。これが第1点です。

次は、野末陳平さんの書かれた「長男の嫁として、妻として」を読んだ感想です。私には長男・長女・二女といます。一番下の二女が、長野県の方に嫁ぎました。先方は長男ですからご両親と一緒に生活をするようになりました。

私は昔の人間ですから、親と同居、家内の親を引取って同居していても違和感はありません。

こういう環境の中で育った娘であり、息子でありますから、親と同居することについては気にすることもないと思うのです。ところが、二女の結婚の話を聞いた人達からは、ことごとく大変でしょうねと言われたのです。娘が好きになった相手と一緒にいるのを、特別な理由がない限り賛成してやるのは親として当然だと考えるのですが、世間一般ではそう単純には受けとめていただけないようです。私としても、最初から親と別居するよう娘に言い聞かせておくべきなのかと迷ったりもしました。その頃たまたま書店に寄りましたら、前述の本が目にとまったのでした。私自身を納得させる意味もありまして一通り読んでみましたが、結論から申しますなら、これからの社会は長男・長女2人の世の中になる、つまり子どもは2人ぐらいになる。日本はそのような時代になりつつあるといえる。

そして自分の長男には嫁をもらいたい、だけど自分の娘は長男にはやりたくない、という意向が強い、これは一体どういうことなのか、ということのようです。

私はこの本を読んで、自分を納得させるためにいろいろと考えてみました。相手の両親と同居することを娘も望み、先方もその気持で迎えていただいている、しかし、同じ家においても、結婚とは若い二人が新しい家庭をつくっていくものである、片や何々家の長男であるという事実も否定はできないから、二人の新しい家庭を壊さない配慮で、嫁ぎ先の家風を引継いでいく、そうすることによって、新しい世帯と従来の世帯の連携、長男という立場を守りつつ新しい家族制度の醸成ができるのではないかと……。

ただ、理論的にはこのように考えられても、人間は感情の動物ですから、実際生活面では理論どおりにいかない点に問題があらうかと思えます。しかし、昔の考え方と違って、少なくとも我々昭和2桁の世代がそういう親の立場になるわけですから、自分たちの老後とか、子どもに対する立場とかを考えていきますと、子どもたちの意志を尊重して、自分たちはできるだけ子どもに迷惑を掛けないように健康に留意して自立した生活を維持する、そして、どうしても心の支えが必要なときに自分の子どもがおり、嫁がいる、という心構えでいることが、今後の子どもの少ない時代を迎えての親の雅量であり、また、子どもたちもそういったことを考えて親に接するならば、新しい家族制度が確立されるものと思えます。

親が娘に、長男の嫁には行くなという教育をしたなら、娘は絶対長男の嫁にはならないと主張するようになります。現に、ある統計では、78%の女性が長男との結婚に反対しています。

これは社会的にも重大な問題です。今回の私の二女の結婚について、周囲の皆さんに気を遣っていただき、親の私も内心これでよかったのかと考えましたが、二人で選んだ道だから二人で責任をとれと、たてまえでは言いたくない。(山脇 忍君の卓話は次回に掲載いたします)